

授業概要

子どもへの教育・道徳・秩序の歴史を、古代以降現在に至る日本社会の歴史に即して総合的に講義する。江戸時代以前の子どもは、農業や商業や工業の労働力と見なされる傾向が強く、いわば「小さな大人」と考えられていた。そうした状況は、明治期以降の国民皆学政策、大正期の「子どもの発見」（小さな大人ではない、子どもという時期の固有な発達段階の明確化、それに伴う保育園・幼稚園の変容）を経て大きく変化した。そして戦争中の「第二国民」という考え方、敗戦後の民主主義の担い手としての子どもという考え方、高度経済成長期の能力主義に根ざした子ども像などを経て、現在にあっては、多様で流動的な子ども像となっている。この授業では、社会や文化の歴史と教育の歴史との関連に留意しながら、子どもとは何かを講義する。また、受講者は全員、自分が小中学校や高校で歌ってきた校歌の歌詞の内容について、授業中に簡単な発表を行う。

授業計画

第1回	ガイダンス：この授業の概要および受講上の必須要件を説明する。
第2回	古代・中世の子ども：貴族・武士の子どもと人民・農民の子ども
第3回	近世という文字社会の成立と子ども：寺子屋に学ぶ子どもたち
第4回	明治の庶民を国民にする公教育：文明開化・近代化の担い手となった子どもたち
第5回	大正デモクラシーの教育：子どもの発見と保育園・幼稚園の変容
第6回	昭和恐慌下の教育：子ども間の格差のひろがりと保育園・幼稚園
第7回	戦争と教育：純真無垢な子どもと第二国民の狭間で
第8回	各人の校歌の発表と意見交換会（1）小学校の校歌にあらわれた子ども像
第9回	各人の校歌の発表と意見交換会（2）中学校・高校の校歌にあらわれた青年像
第10回	各人の校歌の発表と意見交換会（3）校歌とは何か
第11回	敗戦後の民主化教育：市民社会の担い手としての子ども
第12回	高度経済成長期の教育：能力主義にさらされる子どもたちと保育園・幼稚園
第13回	低成長時代の教育：競争から共生へ
第14回	ゆとり教育の子ども像
第15回	まとめ
第16回	筆記試験

到達目標

1. 日本社会の歴史の中で、乳児・幼児・児童の保育、教育がいかなる役割を担ってきたか、その中で子ども像がいかに変化してきたかについて概略的に説明できるようになる。
2. 現在における乳児・幼児・児童の保育、教育をめぐる諸問題に対して、歴史的な視点から問題点を概略的に説明することができるようになる。

履修上の注意

教科書は用いない。講義レジュメと資料を配布する。毎回、資料を用意するので、それらは一つにファイルリングし、必ずそのファイルをすべての回に持参する。毎回、コメントペーパーを提出する。参考文献は適宜授業中に指示する。音楽資料や映像資料を適宜使用する。遅刻厳禁。私語退場。

予習・復習

各回講義後、講義内容をふまえて受講者各自が次回までにその資料全体をもう一度通読しておくことを最低限の復習課題とする。テーマごとに参考文献を提示するので、半期の授業中、ぜひ1冊は手にとって通読してほしい。

評価方法

毎回提出するコメントペーパー（30%）、筆記試験（70%）を合わせて総合的に評価する。

テキスト

テキストなし。参考文献は適宜授業中に指示するが、参考資料としては、山本正身『日本教育史—教育の「今」を歴史から考える』（慶應義塾大学出版会、2014年）がある。